

「中心」の誕生

松本 健

Birth of the Center in Mesopotamia

Ken MATSUMOTO

古代西アジアの社会は農耕牧畜を始めると共に平等共同社会を基本とした農耕集落を各地に形成した。そして各々の集落は生活必需品や奢侈品を求めて独自の交易ネットワークの確立を試みる。その結果、集落間の経済的格差を生み、同じ文化圏の中に中心的な集落が誕生した。また同時に集落内に中心的な公共建物（神殿）が建設された。それらが発展して都市の誕生となつたが、初期の都市は神殿を中心とした平等共同社会であった。そしてやがて王が誕生する。

キーワード：共同社会、交易、経済的格差、中心的集落、神殿、都市

Having started to farm in the ancient western Asia, the man formed a primitive farming community. The settlement has attempted to establish trade network to get luxury goods and the well-being of the society. The trade has caused economical differential among the settlements, and yielded central villages in a cultural area. The central village, which has public building as a temple, grew into a town and city. The economic authority centered in the temple organization. And "en" as a head of the temple community and "lugal" as a temporary war leader or king appeared as the power of the new city-states.

Key-words : community, trade, economical differential, central village, temple, city

はじめに

「中心」と「周辺」という問題に関して、これらの両者の関係が政治的、経済的に「主」と「従」という関係から考察され、そして文明はその「主」が創ってきたと從来から考えられてきた。これらの意味には「大」と「小」、あるいは「強」と「弱」などの要素が含まれている場合も多い。これに対し、地域の特性や都市や国家の役割を重要視し、從来の「中心」と「周辺」の関係を対等の立場から見直そうとする考え方方が現れるのも当然である。ただ、その研究はまだ十分とは言いがたく、現実は単に自らが「中心」という非科学的な感情的、自己中心的主張がなされている場合が多いのではないだろうか。そして我々日本の西アジア史研究者にこの研究が求められているのかもしれない。

西アジアは農耕牧畜の開始とともに集落が形成され、その範囲はレヴァント、そして北メソポタミアにも拡大していった。その過程で建物は半地下円形の建物、方形の建物、そしてそれらを囲む周壁なども造られた。また集落の中には神祠、その周辺には墓地も作られた。それらの集落を概観するとそれぞれにおいて建物群は同じ規模の同じプランを持ったものが多く、平等な共同社会を成していたことが理解される。それらは墓の副葬品からも伺い知ることがで

きる。そして農耕牧畜その他で得られた生産物は平等に分配されていたと推察される。しかし各地に広がる集落間に経済的格差が看取される。サマッラ後期の例を取ってみると、周壁によって囲まれた各地の集落は同じ規模の同じプランの建物で10軒ほどの集落を成し、平等な共同社会を営んでいる。しかしテル・エッソワンとテル・ソンゴルAの副葬品を比較すると、その違いが明らかである。テル・エッソワンの副葬品には多量の石製品、大理石・アラバスター製の人物像、碗、棒状製品、ビーズが納められており、優れた石製品を作るために材料の獲得、製作技術の修得など、農耕牧畜以外にその時間や人手を割り当てていたにちがいない。またスタンプの出土などから、周辺では得られない物や珍しい物の獲得に交易がなされていた可能性も考えられる。一方、ソンゴルAの墓には棒状石製品が1個副葬されているものの、他はテラコッタ製の土偶、彩文土器のみである。このようにソワンとソンゴルの副葬品の違いは経済的格差を示している。

西アジアの初期農村社会は各集落で平等・共同社会が営まれたが、集落間に経済的格差が生まれ始めていた。そして経済的に優位に立った集落が、その同じ文化圏の中で「中心」としての存在を持ち始めていたのである。

こうしたサマッラ期の文化が北メソポタミアのみならず、南メソポタミア（オウィリー、エリドゥなど）にも伝わり、同じような建物の集落が形成されていった。そしてそのウバイド3期の文化は西アジア全土に拡散した。ウバイド文化は地域によってその特徴が明らかであり、南メソポタミアでの3列構成の神殿を中心とした集落／都市、湾岸地域の漁業或いは交易を中心とした文化、中部メソポタミア（ディヤラ川沿い周辺）の十字形の広間を持つ3列構成の建物を持つ文化、北メソポタミア（ガウラ、アルパチャヤ、ニネヴェ周辺）での3列構成の建物（神祠）を中心とした文化、更にシリアのユーフラテス川沿いのシリアの地域性を中心とした文化などがある。このように同じウバイド3期と称される文化のなかでも特徴の違いがあり、それらは地域性の違いか或いは経済的格差なのかが検討されなければならぬが、土器などの遺物の遠距離の移動や広範囲での伝播、また3列構成の建物プランの類似性や、集落に周壁がないことなどから、集落間や地域間での交流、また交易が自由で盛んであったことが理解される。

ウバイド期の都市には神殿が建設され、集落にはその中心的建造物（神殿／神祠）が作られるようになった。同時に各地域に建設された都市や集落間において、中心的都市や集落の存在が明瞭となっていった。ウバイド期の都市は神殿を中心とした共同社会であり、それは1人の支配者或いは王と称される階級の出現以前のことであった。

メソポタミアの「中心」の誕生

イラク・バグダッドの北西150kmに位置するハムリン盆地その中にテル・ソンゴルA（Tell Songor A）(Kamada and Ohtsu 1995; 1996) 遺跡がある。それはサマッラ後期とされ、初期農耕文化の典型的集落を形成している。この周辺のサッマラ後期の遺跡は同じハムリン盆地にテル・リハン（Tell Rihan）(Tusa 1982; Gibson 1978) があり、さらに北西にはマタッラー（Matarrah upper level）(Braidwood et. al 1952)、そしてテル・エッソワン（Tell es-Sawwan level III, IV, V）(Abu es-Soof 1968; al-Adami 1968; el-Wailly and Abu es-Soof 1965; Ippolitoni 1970-1971) と続く。またテル・ソンゴルAの南西にはチョガ・マミ（Choga Mami）遺跡(Oates 1968, 1969)がある。そのソンゴルとチョガマミは100kmの距離があるにもかかわらず土器の形式、彩文のモチーフを含め、建物など際立って類似しているのである。

1. テル・ソンゴルAの特徴 (Kamada and Ohtsu 1995)

土器の形式：龍骨形碗など12種類

彩文のモチーフ：ジグザグ文など29種類

刻文のモチーフ：山形文など8種類

建物のプラン：4列×3列の部屋割り

建物サイズ：6.15m×7.55m (BLD2)

建物の壁：日乾燥瓦の1列積み

煉瓦のサイズ：70cm×16cm×8.5cm

集落の軒数：9軒以上の集落

周壁：周壁の存在

墓：テラコッタ製のコーヒー豆形の眼をしている土偶の副葬品

その他：粘土製投弾や石剣、石製手斧／斧

2. チョガ・マミ (Choga Mami) の特徴 (Oates 1969)

土器：碗の内面に斜めに引かれた二本の並行線の中に点線を描くモチーフが特徴でこれをもってチョガ・マミ移行期(C.M.T)と称されているが、この種のモチーフはソンゴルではない。ただしそ他の土器形式、モチーフなど全て共通している。

建物のプラン：4列×3列の部屋割りをした方形の建物で、ソンゴルの建物と同じである。

建物の日乾燥瓦：葉巻型も出土している。

土偶：テラコッタ製のコーヒー豆形の眼をした女性像でソンゴルの出土品と極似している。

その他：ソンゴルとは特徴に若干の差異は観られるものの共通する要素が極めて多い。

3. テル・エッソワン(Tell es-Sawwan)の特徴 (Yasin 1970)

ハッスナ期最下層I層、II層からすでに方形のプランを有する建物(約16m×16m)が出土して、共同社会が形成されおり、それがIII層になるとプランは異なるT字型になり、周壁および壕に囲まれた集落が作られる。

土器形式：碗、高台付き碗、コーヒー豆形の眼をした人面付き土器などが見られる。

土器のモチーフ：格子文、ジグザグ文などの彩文土器、山形文などの刻文土器、彩文・刻文土器

建物のプラン：T字型 14m×9 m (7.5m)

建物の壁：日乾燥瓦、サイズ：60-100cm×30-34cm、6-9 cm

建物の軒数：9軒以上

建物の周壁：日乾燥瓦によって周壁が造られているが、周壕も一時期造られていた。

墓：副葬品としてアラバスター製の人物像や碗

その他：サマッラ期はIII A、III B、IV、V層にも見られるが遺構の保存状況が悪く、明瞭ではない。

上記の代表的3つの遺跡はそれぞれ特徴を持っているが、これらはサマッラ後期に、集落を周壁で囲み、その中に同じプランの同じ規模の建物を10軒ほど建設し、共同社会を営んでいたということである。従って、個々の集落内では極めて平等な共同体であり、貧富や階級の差という現象は認められない。そして特にソンゴルとチョガマミは建

物のプランや生活用品の土器の形式やモチーフも共通し、両者間にはいろいろな面での交流があったことを示している。この事から両者は距離的に離れた個々の共同体であるにも関わらず、一つのグループに属すると思われる。そしてソワンとソンゴル／チョガマミとの間はそれぞれ平等な共同体という共通点を有しているが、その間の差異も明らかである。それは埋葬の副葬品、特に大理石やアラバスターの利用である。ソワンでは副葬品として彩文・刻文土器の他に大理石やアラバスター製の人物像、パイプ状製品、碗、ビーズが必ずと言ってよいほど副葬されている。他方、ソンゴルの墓は2基確認されているだけであるが、その副葬品は彩文・刻文土器、テラコッタ製の土偶などがある。土偶はチョガマミ出土のものと極めて共通しているが、ソワンのアラバスター製の人物像とは異なり、テラコッタ製でしかも形状がブリミティブである。唯一アラバスター製のパイプがソンゴルにも副葬されていたが、これもブリミティブな形状（男根か？）であり、大理石・アラバスター製の碗が出土していない点もソワンとは異なる。このようにソンゴルやチョガマミでは大理石やアラバスターという材料が広く使用されていない、またソワンの大理石・アラバスター製の副葬品（人物像や碗など）は数量、芸術性に違いを示しており、それらが両グループの経済的・精神的豊かさの格差を表していると思われる。それはアラバスターなどの入手のための交易、或いは生産地と消費地とのネットワークの確立がなされていたことを証明しているが、ソンゴルとチョガマミグループは互いに交流していたが大理石・アラバスター交易ネットワークはなかった。

このほかにもサマッラ後期の遺跡は確認されている。テル・ハッスーナ (Tell Hassuna) (Lyoyd and Safar 1945)、テル・サマッラ (Tell Samarra) (Herzfeld 1930)、バグーズ(Baghuz) (Braidwood et al. 1944)、ニネヴェ (Nineveh) (Cambel Thompson 1967)、マタッラー(Matarrah)、シムシャラ (Shimshara) (Ingold et al. 1970)、テル・リハン (Tell Rihan)、テル・アバダ(Tell Abada) (Jasim 1983, 1985) などがある。ただこれらは発掘面積が狭く全容が明瞭でない遺跡が多い。またこれらの遺跡がソワンのグループに属するか、或いはソンゴル・チョガマミのグループに属するか、或いは別のグループを形成するか今後の課題だが二つのグループに差異があることには変わらない。

このようにサマッラ後期という時期において、集落は一つの共同体として独自の交易ネットワークを形成し、それが他の共同体との経済的格差を生じ、さらにはそれらが「メソポタミアの中心」を形成しつつあったことを示している。そしてそのもっとも重要な要因が交易ネットワークの確立であったと思われる。

ウバайд3期のウバайд・エクスパンション

ウバайд3期の紀元前5000年頃においてはすでにその文化の中心地が南メソポタミアのエリドゥ及びその周辺にあったと推定され、その文化が南メソポタミアから北部メソポタミアやイラン高原、また湾岸沿岸へ伝播したと言われている。しかしその伝播の場合、強力な支配者のもと交換が行われた（ウルク・エクスパンション）のではなく、自然発生的に拡散していったと思われる。従ってその拡散のルートは必ずしも直線的である必要もなく、一方である必要もない、また急ぐ必要もないという状況であった。そして往来が自由、安全そして容易であれば、そのルートはいろいろの目的を叶える道として利用され、受け継がれていた。それは集落と集落、都市と都市、集落と狩猟採集場所、集落と聖地、都市と交易場所、都市と原産地、都市と原産地を結ぶ中継地、商業地と生産地など、そこにはいろいろなルートと都市や集落の役割が浮かび上がってくる。

ここにウバайд時代の文化伝播特に土器の伝播のモデルを考えてみたい。ウバайд期のセンターがエリドゥやその周辺の南メソポタミアから北メソポタミアに伝播する場合、例えばエリドゥの土器がテペ・ガウラに至るまでの移動、ないしはそれらの形や要素が伝播する場合の幾つかのケースが考えられる。

1) 土器そのものが運ばれた場合。エリドゥの土器が中部メソポタミアを越え、北のテペ・ガウラに至るまで約800kmの道のりを渡った。土器が800kmの遠距離まで運ばれることは極めて稀であるが、搬入品と称されるものである。またそれは特別の用途を有するものであった（後のウルク後期のベベルドリム土器のように）と考えられるが、ウバайд3期には極めて特徴的な長いラッパ状の注口を有する壺などがこれに相当する。これらの類似品がエリドゥ、ソンゴル、ガウラに見られる。それらが胎土分析などによって同じ生産地とされるならば直接搬入されていることになり、そして搬入者の強い要請があった可能性があり、またその搬入者は権力或いは経済力を有していたに違いない。仮に胎土分析の結果それが異なる生産地であったにしてもその形式や彩文のデザインが800km遠方の北メソポタミアのガウラに伝えられていることは伝播という問題にとって重要な意味がある。

2) 同様な土器が各地で伝えられまた作られながら伝播した。これはエリドゥ周辺の集落の土器作りの出来る半專業の陶工が流行の土器を真似て作る、それをまた周辺の半專業の陶工が真似て作るという方法で、土器が伝播していったとする考え方である。しかし単に流行を模倣するだけで800kmに至るまでオリジナルのデザインが維

持されるであろうか、遠隔地になるほど、ローカル性の強い土器に変身するのではないかとのいう疑問が生じる。

3) 陶工が移動した場合。エリドゥのような都市では人口も多く、消費力があり、陶工も専業として常に土器の生産、販売に励むことができる。それに比べ10数軒の集落では農耕、牧畜以外の陶工を含む加工業などの専業は成り立たない。しかしながら陶工が集落から集落へ移動し、土器を製作し販売・交換することによって、陶工という専業が成り立つ。ウバイド期は10数軒の集落がメソポタミアに点々と散在する。それぞれの集落は農耕・牧畜によって自給自足をしながら生活をしているが、ウバイド3期の土器は湾岸から東地中海に至るまで広大な範囲に分布する。

仮に一軒に5人家族、1年に1人一個平均の器が配給されたとするならば、10軒の集落で50個の土器である。土器窯1基で、一回で製作されるのが50個（これには窯や個々の器の大きさなどが関係するが）の土器とするならば、一年一回の土器製作で充分である。実際の生活では土器が破損して一家族に3個の器になったとしても生活は成り立ち、二年或いは三年に一回の土器製作でも間に合ったと思われる。このことは小規模の集落の中で陶工としての専業は成立しないことを示す、にもかかわらずウバイド期に形とモチーフが融合した芸術性の高い、また良質の土器が生産され、広くメソポタミアに分布していることは専業の陶工が製作したと考えざるを得ない。ウバイド期の場合、南メソポタミアの都市に住む陶工の弟子や家族が周辺地域に出て各地で土器製作を行ったと考えられる。陶工はある地域に長期にわたって生活をすることもあった、またどこかの地域に住み着いてしまうこともあったであろう。そして南メソポタミアの陶工は異文化の陶工にも接することもあった。例えば南メソポタミアのウバイド3期の文化と北メソポタミアのハラフ期の文化が共存し、文化接触があった。一般に先史時代では広い範囲に共通の文化が自然に伝播していったと考えられることが多いが、集落は元来自給自足、自己防衛の上に成り立ち、隣接する集落とはむしろ一線を画することが多い（前述のサマッラ期の周壁に囲まれた集落のように）。従って外の社会の情報や物は隣接する集落のみならずこうした移動する技術者集団や行商人から得ることが多かったと推定されるのである。その結果として、広い範囲の共通の文化が成立したと思われる。土器と人々の関わりを考えた場合、単に貯蔵や運搬などの器としての機能だけでなく、埋葬の甕棺、副葬品の一部、祭儀の装置としてなど使用されていたことも事実である。更には土器と共に粘土製品としての日乾燥瓦作成やその建造物の建設など陶工が関わっていたことも否定できない。小磯

氏が紹介している北インドの民族例は興味深い（小磯2001）。移動する陶工は現地生産した土器を提供すると同時に都市すなわち「中心」のあらゆる情報や技術や物を提供した知識人であり、或いは祭司であり、集落の人々にとって欠かせない集団であったと思われる。また新天地を求めて技術者集団（農耕民を含む陶工、土木・建築、呪術師など）が都市から移動し、そして新天地に定住したこともある。と思われる。

こうした陶工などの技術者集団がどの範囲で移動したかを推測する場合、地形的に南北メソポタミアの中間、すなわちディヤラ川流域およびハムリン地区と思われる。これらの地域はまた先史時代におけるサマッラ文化やハラフ文化の南限にもあたる。またウバイド2期及びウバイド3期の始めには北限がこのハムリン地域にあり、北メソポタミア文化と接触していたことから、陶工をはじめとする技術者たちは400km程度の距離を移動していたと推定される。そしてそのウバイド文化が隣接する異文化のハラフ文化にも伝えられ、やがてウバイド3期の文化はテペ・ガウラに達し、更には東地中海沿岸にまで達したのである。これらの伝播は幾つもの集団が移動し、また集団から集団へ受け継がれていたとも考えられる。そうして幾つかの集団が南メソポタミアにはない宝石、鉱物、顔料などの原料やその他の珍しい品々また交易情報を北メソポタミアや周辺地域から入手して南メソポタミアの都市にもたらした。こうしたことが繰り返され、ウバイド文化が拡散していったのではないだろうか。

文明の誕生

メソポタミアは古代において政治、経済そして宗教の中心地であった。それはウバイド後期における都市の誕生と共に始まり、ウルク期・ジェムデッドナスル期に発展していった。その都市は当初小規模であったが、都市での生活は旧来の農耕栽培生活や狩猟採集生活とは全く異なっていた。都市の城壁内では神殿に仕える神官、呪術師や巫女、建設業務に従事する建築師や土木技師、都市や神殿を管理・記録していく書記、そしてこれらを管理運営する最高責任者である王やその家族、また守護する兵士達、その他いろいろな物を作り出し、また加工する生産加工業者、冶金師、金物師、織物師、染め師、工具師、家具師、農具師、陶工、宝石加工師など、製品を作り、加工し、売る、またそれらに必要な原料を仕入れてくる商人たちがこの都市を拠点としていた。こうして都市ではいろいろな物が生産され、売買されたが、生活に必要な穀物や家畜、そして製品を作るための原料など全て、都市の周辺地や遠隔地から運んで来る必要があった。メソポタミアの都市は穀物や原料の集積地であり、種々の物を作り出す生産地であり、同時

に巨大な消費地であった。そして社会はそれらの需要と供給基づいた関係であった。その均衡が崩れれば侵略・略奪が生じ、またその他の供給地に変更された交易都市も衰退していった。古代はこうした状況の繰り返しであり、文明を誕生・発展させた交易ネットワークは消費する都市と原料を産する原産地との需要と供給のバランスのとれた関係であった。そこには原産地-集積地・加工地-中継地-消費地のような関係が生まれ、それぞれの都市の役割が専門化していった。例えば、ラピスラズリ或いは紅玉隨の交易ネットワークを考えると、原産地はアフガニスタン、それがインダスに集積し、そこで加工され、それが再び湾岸の港湾都市を中継地として大消費地ウルクにもたらされるのである。こうした機能が潤滑に働いている間は原産地、集積地、加工地、中継地、消費地は互いに繁栄していく。しかし交易ルートの安全性の低下や、物資の質の低下、物価の値上がりなどが異常に起こって、そのネットワークが働くかなくなった場合、それは破綻をきたす。その継続の是非を判断するのはネットワークの各拠点である。特にその交易を管理・支配する権力者の判断は都市の存続も左右する。湾岸の場合、後藤氏によると「陸路から海路への文明の移転」(後藤 2002)が行われたという。ただその交易の中継地の移転がなされても生産者・加工者と消費者は変わらずインダスとメソポタミアの都市である。この「移転する文明の地」において独自の文明は存在するのであろうか。交易都市は機能の違いで分類することが必要である。そしてそのネットワークの中で消費地である都市が主に牽引車となつて文明を創造していくが、文明はまた消費地、中継地、集積地、加工地、原産地を含めた総体が創り出していくものである。

引用文献

- Abu Es-Soof, B. 1968 Tell es-Sawwan Excavation of the Fourth Season (spring,1967). *Sumer* 24: 3-16.
- Al-Adami, K.A 1968 Excavations at Tell es-Sawwan Second Season. *Sumer* 24: 57-94.
- Braidwood, R.J., L.S. Braidwood, E. Tulane and A.L. Perkins 1944 New Chalcolithic Material of Samarran Type and its Implications. *Journal of Near Eastern Studies* 3: 47-72.
- Braidwood, R.J., L.S. Braidwood, J.G. Smith and C. Leslie 1952 Matarrah. *Journal of Near Eastern Studies* 11: 2-75.
- Calvet, Y. 1983 The Sounding Y27 at Tell el'Oueili. *Sumer* 39: 24-36.
- Campbell Thompson, R. and M.E.L. Mallowan 1933 The British Museum Excavations at Nineveh 1931-32. *Annals of Archaeology and Anthropology* 20: 55-116.
- El-Wailly, F. and B. Abu es-Soof 1965 The Excavation at Tell es-Sawwan, First Preliminary Report (1964). *Sumer* 21: 17-32.
- Gibson, McG. 1978 Chicago-Copenhagen Excavations at Uch Tepe, Hamrin. *Sumer* 35: 467-471.
- Herzfeld, E. 1930 *Die Ausgrabungen von Sammara V*. Berlin
- Huot, J. 1996 *Oueili Travaux de 1987 et 1989*. Paris, Editions Recherche sur les Civilisations.
- Ingold, H., A. Tinn, M.L. Friis C. Renfrew, H. Tanber, D. Reimer and E. Vohsen 1970 *Tell Shimshara the Hassuna Period*. Kobenhavn, Munksgaard.
- Ippolitoni, F. 1970-71 The Pottery Tell es-Sawwan: First Season. *Mesopotamia* 5-6: 105-179.
- Jasim, S.A. 1983 Excavations Tell Abada: A Preliminary Report. *Iraq* 45 (2): 165-186.
- Jasim,S.A. 1985 *The Ubaid Period in Iraq: Recent Excavations in the Hamrin Region*. BAR International Series 267. Oxford, Archaeopress.
- Kamada, H. and T. Ohtsu 1995 Fourth Report on the Excavations at Songor A : Samarra Period. *Al-Rāfidān* 16: 275-366.
- Kamada,H. and T. Ohtsu 1996 Fifth Report on the Excavations at Songor A : Details of Samarra Features, Stone and Bone Objects. *Al-Rāfidān* 17: 57-76.
- Lloyd, S. and F. Safar 1945 Tell Hassuna. *Journal of Near Eastern Studies* 4: 255-289.
- Matsumoto, K. 1986 The Samarra Period at Tell Songor A. *Prehistoire de la Mésopotamie : Colloques internationaux CNRS 17-18-19 décembre 1984*, 189-197. Paris, Editions du CNRS.
- Oates, J. 1968 Prehistoric Investigations Near Mandari. *Iraq* 30: 1-20.
- Oates, J. 1969 Choga Mami 1967-68: Preliminary Report. *Iraq* 31: 115-152.
- Tusa,S. 1982 Tell el-Rihan. *Sumer* 38: 29.
- Yasin,W. 1970 Excation at Tell es-Sawwan 1969 Report on the Six Seasons Excavations. *Sumer* 26: 3-20.
- 小磯 学 2001 「北インドにおける土器製作—その儀礼的背景—」『西アジア考古学』2号 95-110。
- 後藤 健 2002 「アラビア湾出土のメソポタミア系土器」『西アジア考古学』3号 7-19。

松本 健
国士館大学イラク古代文化研究所
Ken MATSUMOTO
Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq,
Kokushikan University